

発行元  
東京新聞  
南千住専売所  
Tel.3803-1781  
発行責任者  
鬼塚 佳代子  
Tel.090-2657-0300

# すまいるたん

第84号  
平成20年  
10月3日



## 都市の動脈、再生資源の祖

日暮里

「水、熱、ごみは都市を維持する  
三要素、動脈なんです」

荒川区リサイクル事業協同組合は平成13年に設立されました。荒川区内の46社で構成され、荒川区からの委託を受け区内の再生資源（ビン・缶・古紙・発泡スチロール・トレイ・ペットボトル）の回収業務・選別加工をしております。

ごみは、誰かが一度は所有し、その後価値を失った物、役に立たなくなった不要物を言います。しかし、この中には資源として再利用できるものが沢山あります。今日では再利用できる資源はごみと言わなくなりました。

再生資源再利用の歴史は古く、江戸時代から産業として成り立っていたものの中に江戸の名産品の一つと言われた浅草紙があります。浅草紙は浅草寺が屑紙を与えて、この地区の農民に副業として寺用の漉き返し紙（今でいう再生紙）を漉かせ始めていたと言われています。安価な塵紙で、江戸庶民に親しまれ、主に鼻紙や落し紙などに常用されてきました。江戸の屑紙業界は浅草に始まり、明治初年にかけて山谷町、橋場町から千住、梅田方面へ移動し、近郊農家の副業として繁盛

しました。

大正十年一月の寺田寅彦の随筆「浅草紙」にはマッチのペーパーや活字の断片がそのままに眼につくうちはまだ改良の余地はありと書いてあります。明治末期には下谷・浅草を中心に約千軒の屑物業者があり、数万人の買出人・拾集人が従事したと推定されていきました。

明治40年以降、屑物取扱場取締規制により、東京市以外に屑物業者は移転を強いられ、浅草・上野に近い市外である北豊島郡の荒川区に集まるようになりました。交通の便のよさに加え千住製絨所・東京板紙・王子製紙千住工場の存在、又明治38年に日暮里・三河島間が開通したことなどの立地条件から約500軒の業者が移転してきました。輸送手段の整備は全国各地から大量に集荷を生みしました。大正時代には警視庁の規制により、工場地域は日暮里・三河島・千住地区のみに限定されるなどの経過もあって、第一次世界大戦、関東大震災を経た後、日暮里地区は全国再生資源の一大集散地となりました。当時は、一度日暮里に入荷しないと相場がわからないと言われていました。

第二次大戦後、古布（ウエス）産業の最盛期を迎え昭和50年ごろからは古紙産業も頭角をあらわしました。大量消費の時代を迎えた今、リサイクル事業は荒川区の最大の産業であると共に荒川区のごみ減量への大きく貢献しています。組合員46社の内に

は江戸時代より今日までそれぞれの社会背景の中で、脈々と活動続け今日3代目が活躍して会社は多くあり、4代目も珍しくありません。

「もったいない」

3R リスベクト Respect (尊敬の念) // もったいない  
リデュース Reduce (減) // リース Reuse (再利用) • リサイクル Recycle (再資源化) という環境活動の3R

をたった一言で表せるだけでなく、かけがえのない地球資源に対するが込められている言葉「MOTTAINAI」が環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人女性ワンガリ・マータイさんによって世界共通語として広められています。

私たちが日々生活の営みの中から排出する再生資源（ビン・缶・古紙・発泡スチロール・トレイ・ペットボトル）がどのように回収し選別処理されているか、区内で日々活動している選別処理施設を見学して、再生資源の質、量を体感してみませんか。  
見学希望者は荒川区リサイクル事業協同組合と相談してください。  
再生資源の回収などをシリーズとしてまた掲載致します。



荒川区リサイクル事業協同組合  
荒川区東日暮里1-39-12高橋ビル1F  
Tel.5850-4561  
Fax.5850-4570